

末黒野

すぐらの

4月号 (通巻848号)



寒日和

小川 玉泉

(名譽主宰)

縁側にいまも妻の座寒日和
咳こらふ閲覧室の静かさに
齒医者への出足そがれぬ牡丹雪
声だかに我が身の鬼も打ちにけり
杖を止め見下ろす坂の花辛夷
隣よりややの泣き声ふきのたう

声だかに我が身の鬼も打ちにけり

立春の前夜に行われてきた鬼やらいの行事は、地域ごとに趣をことにしている。大きな社寺では、盛大に行われるが、一般家庭では、隣近所に気兼ねして、小さい声での行事になった。柵にいれて神棚に供えた大豆を「鬼は外、福は内」と大声で唱えながら四方に撒き、心の鬼から、退治することを誓った。

冬ざれや

はたはたと羽音ゆたかや初鴉
篝火へ闇の攻め来る初詣
大本山影も正しき冬木立
寒椿寺に飼はれて孔雀啼く
ぼうたんの冬芽ほつほつ禅の庭
冬ざれや光となりて峡の川
海中の不如歸の碑雪催
寒風や磯馴の松の御用邸
寒林の吐く闇の濃し杣の道
二駅を乗り継ぐ句会息白く
畳み来る寒濤碎き烏帽子岩
読み止しの句集歳時記寒灯下

松本三千夫

小氷柱大氷柱

鐘樓のまはりに挙り冬木の芽
潮の香や入江の宮の初詣
若水を汲む産土の星の下
麻縄の結び目固き初荷かな
雪吊に雪降り景の定まりぬ
飛行機雲縦に流れて冬うらら
飛驒の日の薄し小氷柱大氷柱
山茶花散る道子等の帰る道
なほざりにせし寒菊や淡き紅
ふつときてダリの眼となり冬の蠅
出航やどつと四温の鷗どち
いつせいに鴨に鳴かるる寒さかな

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

日向ぼこ

森清信子

児にもらふほんとの笑顔日向ぼこ
除夜の鐘しみゆく闇の深さかな
堂裏の藪をゆるがし除夜の鐘
透き通る沢の水音 鋏始
霜降りつ深々と富士暮れ落ちぬ
張り詰むる星座際立ち空つ風
武家屋敷の高き黒堀六花
迸る水にふくらむ冬菜かな
墨の香の残る座敷の淑気かな
峠より淡き昼月枯木立

枯木山

安斎久英

墜道を抜け満目の枯野かな
凍蝶の折り目正しく事切れぬ
山眠る餌を欲る鯉の息づかひ
のしかかる雲支へをり枯木立
瀬音鳴る枝さし伸べて冬紅葉
暮れなづむ沼忽ちに鴨の陣
年の夜や悔いを明日への糧として
手の平に神木の気を初詣
曾孫の腕にずしり明けの春
七福神の絵柄揃へぬ柳箸



咳 一 つ

石 黒 興 平

大嚏満座の視線集めたり
持ち寄りの駄句を肴に年忘れ
鮫鱈の箱の形にをさまりて
張り詰むる内視鏡室咳二つ
気ままなる年金暮し去年今年
まつすぐに男坂ゆく初詣
なつかしきお国なまりの御慶かな
淑気満つ所作ゆつくりと能舞台
初買や活字の大き旅の本
いささかの夢あたたむる初湯かな

新 年

田 中 臥 石

除夜の鐘撞くてふ妻や梳る
海へ出て一気に昇る初日の出
年酒酌むいきなり灘の生一本
ふるさとの謡酔顔松の内
海ひびくいさばの径の薺摘む
海の日 of 犇犇届く仏の座
娘訪ふ楨垣を透く寒紅梅
冬日射す娘の家の高榿
成人の日の海荒るる九十九灘
朝食の残り数の子噛みぬたり

冬木の芽

森 清 堯

夕照の燃えむばかりの枯野かな
小流れの音曲り来ぬ片時雨
枯すすき撓りてもなほ筋通し
十二月書き消す跡へ予定また
初日燦眼下の湾を見て飽かず
筑波嶺の空を傾け初鳥
ひとり居の母や八度の年女
向き変ふる連れにつられて日向ぼこ
刃を入れて締まる白菜音高く
冬木の芽こぞりて隠岐の空の下



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



寒 林 加藤静江

初 日 記 岡野里子

胸元の香りを数へ冬至風呂
俳句めくや捨つる省くの年用意
沈黙のやがて響めき初日の出
言霊の幸はふ国や初御空
百軒の百のしきたり大旦
真白なる未知の重さや初日記
寒に入る重たきものに吾が齢

初 便 り 菅野日出子

年の暮御朱印帳の滲む墨
夜回りの人にひと言繰る雨戸
供花に剪る垣の山茶花まくれなる
足早に過ぎ行く齡除夜の鐘
宝とも思ふ匂友や初便り
座禅堂にひびく警策四日早
潮入りの離宮の水面浮寝鳥

お年玉

齊藤マキ子

竹林

吉田きみえ

かさかさど枯葉の音を袋詰
注連緬ふや牛飼ふ里のかぞへ唄
短日や遊び足らざる子らに風
煤掃や書架に俳書の増えてきし
風花やこの青空のいづくより
のけ反れる嬰にも渡すお年玉
真似事で済ます二人の七日粥

鳥総松

堺

昌子

一雨に落ちて紅増す冬椿
千両を活けて客待つ昼下り
枯るるもの枯れ竹林の風の音
里山の空の深さや冬ひばり
戸を繰るや庭一面の霜柱
五日はや人の溢るる町医かな
枯菊の雨の重さを束ねけり

初

夢

今村千年

山茶花や雲脚早き露天風呂
早咲きの梅のかをるや神ながら
子等の眼のきらとかがやくお年玉
子にきいて孫におそはる寒昂
鱸綱は鷗の抛り所寒の潮
筆書きの賀状の友や息災と
長湯してつかれ流せり鳥総松

一人づつ別れてひとり夕時雨
野の花の匂ひ残して冬枯るる
露座仏の緩ぶ法衣や四温晴
初夢や笑顔で招く考と妣
京嫌ひなれど頑固に京雑煮
子も孫もみな旅の宿初電話
露の世は楽しく生きん年の酒

沖へ船

大川暉美

春浅し風の硬さの触るる谷戸
鶯の声に膨らむ里の朝
柔らかなる春日押し行く乳母車
桜大樹花の色なる風の舞ひ
パン焼くる匂ひほのかや衝薄暑
田に映る雲引つ張つて水馬
本堂の補修の木の香梅雨晴間
白壁に影の舞ひをり揚羽蝶

風鈴や次の風待ち音を待ち
金柑の花の散り敷く路地住まひ
風通ふ風の形の花芒
ネックレス外す窓辺や夕月夜
秋の夜やルーペ片手に旅の地図
子らの声聞かぬ里道木の実落つ
木仏のひび深々と冬立ちぬ
天つ日に秘むる力や冬木の芽
百畳の堂に棲みつく寒さかな
ともしびの影やはらかき聖夜かな
寒風や光まとひて沖へ船
岬鼻を攻むる怒濤や野水仙

春疾風

庵原敏典

江の島へ帆を集めをり春疾風
木の芽風キンダの塔の煉瓦錆び
式典に連れ立つ母の春裕
瑕瑾なき空に始まる聖五月
風薫る幼の列の保母若き
茅屋根や崩れに生ふる夏の草
薪能かがり火爆ぜて闇深め
天草干す鄙の渚港の漁師老い
山峡の霧の底より瀬音かな
秋澄むや時ゆつくりとローカル
過疎となりいよよ色濃き葛の花
秋徴雨動くと見えぬ一斛
瓦斯灯のあかり滲むや小夜しぐれ
ビニールの花室蟹のほまちな
かはらけに巫女注ぐ神酒の淑気かな

夕映え

池谷鹿次

そよ風や湖面を撫づる糸柳
 落椿岬の風の衰へず
 夕映えをまとひ台地の梨の花
 湯の宿や瀬音に混る夕河鹿
 湖や入日に映ゆる大花野
 竹林に帰る雀か夕焼雲
 芋の葉の朝露光る谷戸の道
 漁火の見えぬて遠し三日の月
 岬山の一樹帰燕のよりどころ
 秋茄子をもぐや朝の日まぶしくて
 夕映えの富士迫り来る野路の秋
 故郷は一望千里刈田原
 秋草の原にくつきり今朝の富士
 羽衣の謂れの松や小鳥来る
 水仙や崖の下より波の音

身辺整理

小沼 糸 み 子

過 一 糸 敬 枯 風 鎌 蠅 幼 彫 昭 漱 蝶 春 ぼ
去 仕 瓜 老 梗 入 倉 帳 児 塑 和 石 番 光 け
棄 事 忌 日 や れ の や に 館 の の の や 封
つ し や の 子 や 梅 缶 も の 日 居 き 寄 じ
る て 根 の 押 雨 詰 あ 屋 縁 さ い り の
身 ひ 岸 紅 規 入 も 二 る 根 故 う と て 護
辺 と 二 少 庵 れ ま 個 溜 裸 疎 開 書 な 音 何 摩
整 休 丁 し 庭 の 隅 た の 息 や 像 婦 を 語 齋 余 博 納 木
理 み 目 濃 の 肩 よ 期 限 し 風 風 青 合 の 寒 打 ぬ
小 屋 地 く 文 た し 段 切 薫 風 青 合 の 寒 打 ぬ
六 の 多 祝 庫 た 段 切 薫 風 青 合 の 寒 打 ぬ
月 虫 き 膳 蔵 き 葛 れ る し ひ 昼 な 木 詣

ふるさと

片岡さか江

微塵粉の打菓子二つ雛祭
しなやかに五体反らすや春の雲
青葉潮魚の名太く釣の宿
荒梅雨の山を削りて降りかけり
父の日の酒肴に添ふる御強かなり
茄子漬の紫紺美し朝の膳
新書買ふ夜の学子に夜は短くて
迷ひ込む路地に社や秋うら
好日や考の好みのとろろ汁
新酒酌み紅に染めをり項まで
帰りたきふるさとあり小六月
木枯や無人駅舎に子供絵
風凧ぎて水面に鴨の陣二つ
靴音の刻む二拍子の師走来る
山裾の藁葺きの家の初雀

半夏生

滝沢いみ子

臥竜梅添へ木の竹の新しき
花菜群る水平線を遠くして
鯉幟風の大阪どんと蹴りり
更衣二の腕にし風生れけり
鰐口の綱新しき半夏生
美智子妃の優しき笑顔合歡の花
山莊の茸づくしや八ヶ岳
水の輪をぶつつけ合うて水馬
ぐんぐんと伸びて凌霄咲き垂る
町店の閉ぢ軒先の花菖蒲
海紅豆遠き汀の風うけ
谷戸歩き銀の波立つ芒原
鎌倉へ紅葉狩とや賑へつり
草の花谷川岳の耳二つ
除夜の鐘とどく心の平かな

水鏡

塚越弥栄子

延べ段を足裏に伝え梅見寺
温もりを空に押し上げ露のたう
野梅咲く素朴の風の清らかに
花曇り紙ナプキンに書く略図
馬車道の春風に乗る汽笛かな
沖波の淡き光に春かかも
どこまでも空駈けあがれ初燕
二人居の刻ゆるやかや新茶汲み
月映し峡の代田の水鏡
蝉生れて必死の構へ梅の木に
梵鐘の音色にこもる残暑かな
淡々と落葉溜りの音を踏む
警笛にうごく豆汽車秋の雲
灯に映えて明日へとつなぐ白障
日表や小紋めきたる冬桜

耕耘機

大霜朔朗

怖づ怖づと差し出すはこべ軍鶏の籠
訳もなく走りたくなる風車
公道に春泥の散らし耕転機
小流れの鷺の動かさず葦の角
マーガレットをちぎる占ひ好き嫌ひ
疎開時の寺を訪問麦の秋
椎の実の踏きれて白し遊歩道
蒼天や飯桐の実のたわわなる
大輪の三本仕立て菊花展
赤き実を凶鑑に探す今朝の冬
冬野菜農婦に重き背負籠
短日や自転車灯す部活の子
バケツの水飲み干す牛の息白し
ポスタの会の画鋏四色春近し
人生の出会いに感謝初句会

春兆す

加瀬伸子

鬼瓦をふはりと包み春の雪
 春の日を壁に塗り込む左官饅
 京の香の和綴ぢの句帳春兆す
 抽斗に想ひ出たみ更衣
 袖垣の棕欄の緒固し牡丹園
 爽やかなにアールデコ調文学館
 西行の歌碑に染み入る秋の雨
 火櫓の壺に投げ入れ唐辛子
 窯出しの壺に耳あり小鳥来る
 石路の花安房の小島の真砂女の碑
 事始め京の舞妓の抜衣紋
 氏神の千木にあまねし初明り
 福梅と佳き菓子の名や初茶の湯
 初護摩の高き火の穂や紫衣の袖
 端溪の硯のうみや寒の水

菖蒲湯

芝田幸恵

針持つ手ときには止まる秋思かな
雑念を一気に揺るやとろろ汁
秋天へ吸ひ込まれゆく小海線
小春日や猫のあくびは体ごと
鮫鱈鍋湯気も気炎もあがりけり
大空をささへて瘦せし枯木かな
春眼や四肢も五・感・もなきごとし
春灯のひとつひとつに夕餉あり
意志通す晩節もあり白つつじ
緋牡丹の屈託といふ翳りかな
心太ささと啜りて男前
爆音の過ぎたるあとの炎暑かな
大地這ふ根の力こそ夏の草
秋灯塗りの紵台祖母譲り
朝顔のまだ咲ききらぬ高さかな

白牡丹

山口登

連 風の揚がる尾の先富士の山
間 合ひ良き初音のとどく句会かな
乗 り合はす化粧刷く子や日のうら
白 牡丹虫一匹を包みこみ
梅 雨の星スカイツリーの硝子窓
鎌 倉や初夏の風の負ふ寺詣
初 蟬や一節の声定まらず
鮎 の骨丁寧にぬく白き指
川 風を箸休めとしく船料理
小 半時待つても土用の鰻かな
日 焼の子の少なくなりぬ始業式
千 枚田畦に色添ふ禅寺丸
手 料理の味はひゆたか零余子飯
秋 の虹富士の裾野を包み込み
書 き初めや墨痕滲む蘭亭序

古都素描

高木邦雄

秋 う ら ら 白 雲 誘 ふ 旅 心
影 き 五 重 塔 や い わ し 雲
秋 の 昼 老 僧 下 る ね ね の 道
水 澄 む や 疎 水 遡 上 の 魚 の 影
秋 深 し 山 門 高 き 禪 の 寺
秋 晴 の 三 十 六 峰 雲 置 か ず
京 焼 を 商 ふ 路 地 の 秋 日 濃 し
身 に 入 む や 余 韻 の 長 き 暮 の 鐘

銀閣や秋天統ぶる鳶の笛
回廊に木杳の響く七五三
鳴き龍の声招くかに秋しぐれ
風湧くや木の実降り来る堂庇
落柿舎の句碑の湿りや昨夜の露
笑みこぼすわらべ地藏や菊日和
洛北の里の山畑柿熟るる
鱗雲影清かなる池の面
秋澄むや弥勒菩薩の指細く
森閑と暮るる奥社やそぞろ寒
舟溜柳散り込む水の面
灯の遠き古都のタワーや星流る

青炎集

松本三千夫選



横浜 及川照子

狭山 沼崎千枝

初夢や記憶の人のみな優し

熊の出る噂を抱き山眠る

青墨の匂ふ掛軸初座敷

健やかなる命寿ぐ雑煮かな

埋み火をおこし親しむ峡の宿

媼にはおうなの夢や枯野行く

横浜 正谷民夫

横浜 前原マチ

夜神楽や鈿女命の指太き

着ぶくれて拝む釈尊苦行像

電飾の綺羅より遠く聖夜更く

正月や八臂弁財天笑まふ

拾萬両飾り小判の賑ははし

初富士を上りの窓に新幹線

蕪汁秩父の雲の動きけり

煮凝の小骨探して虫眼鏡

猿枕後期高齢二人住み

雪晴の越後の里や光りをり

ゲレンデの若さの中を滑りけり

冬満月川面を統ぶる午後十時

ドック跡に若人あふれクリスマス

冬ぬくし古刹の千のまねき猫

静寂の寺町通り風冴ゆる

出番待つおかめと会話里神楽

三が日舟の形の月澄みて

瓦斯灯に馬車の彫刻松飾

横 浜 川 美 智 子

一点の雲も無かりし大豆煎

数の子やほんのり甘き加賀の酒

買初の試着に迷ふ少女かな

たつぷりの初湯や癒ゆる足を伸べ

港の灯の物語めく冬の旅

船旅や寒満月の中天に

横 浜 梅 田 武

かき揚げは我が家の決り晦日そば

齡百病知らずの炬燵猫

腕白の腕白となる二日かな

黒豆の艶に満ちたる淑気かな

寄せ植系の福の要や福寿草

蒼天や小鉤きらりと梯子乗り

横 浜 川 村 亘 子

古里へ続く青空初御空

むつみ月むすめふさほせ競ふ子等

茜さす夕富士の黙寒に入る

一と日ただ雨音密か寒四郎

寒月光音遠ざかるハイヒール

白早梅薄うす残る昼の月

横 浜 東 小 蘭 美 千 律

純白の峰の輝き櫓の宿

朝日浴び飛び発つ鷺や冬の川

仕舞湯や柚子ゆらゆらと背に触れ

朝なざな見慣れし富士の御慶かな

枯蓮の皇居内濠朝日影

冬日和苔ふんはりと石被ひ

横 浜 饗 庭 恵 子

仏壇へひとりごちたる寒さかな

鷺降りて枯葦の景とのひぬ

憂きこともまとめて括る札納

霜の朝蜂蜜の糸とめどなく

池底の硬貨ゆらげり寒日和

大寒や寛の音のより高く

川 崎 平 澤 侃

初御空地球に戦火ある不思議

初詣漢絢の曇み嫉

喰積の片減りうめる妻の所作

砂被りに漬し島田や初相撲

襦袢市や客も主も歌舞伎者

寒満月浮かびし顔の愉色かな

耕 土 集

黒滝志麻子選

三郷 中谷 未知

熱爛や来し方手繰る夫婦旅
真つさらば年移りゆく去年今年
見慣れたる筑波新たや淑氣満つ
成人の孫晴れやかに屣蘇交はし
トランプの如く仕分くる賀状かな

横浜 五十嵐富士子

鎌倉 丸山千穂子

上弦の月や歩道の影冴えて
蹲踞に濃き影落し寒椿
海蝕の崖に寄せたる波の花
寿を交はず春着の襟白し
墨の香の満てる座敷の淑氣かな

冬木立飛び交ふ鳥のけたたまし
夜回りの寒柝かすか雨上り
臘梅の仄かに匂ふ足湯かな
些かも鐘の音待つ間去年今年
初乗の駅弁買ひて気儘旅

飛田 典子

横浜 市川 夏子

湖の風水尾の生まれて鳴の陣
一筋の水音残し山眠る
雨後の土割りてあをあを冬の草
人日やゆるぎ時間を刻む音
御降りを肩に鳥居を潜りけり

急くほどに体動かぬ煤払
裸木の揺るる梢に雀二羽
忙中閑座して句を詠む年忘れ
寺庭の清らに一枝冬至梅
初鴉風切る音の強さかな

長田 厚子

中里 昌江

裸木のつつき上りしけらの跡
筆太き師の年賀状久々に
獅子舞や待ちくたびれて門の内
初句会猫の逃げ出す夕まぐれ
新年会交はずグラスの音のよき

坂の道笹子の声に背を押され
鶏飯の炊ける匂ひやクリスマス
禅寺の寒氣貫く鐘の音
日脚伸ぶ天神様の石畳
あをあをと大王松の淑氣かな